

母性および小児看護学実習における看護学生の対児感情の変化

和田佳子, 大久保明子

新潟県立看護大学

Changes in Maternal Affect Toward Babies of Nursing Students through Maternal and Pediatric Nursing Practicums

Keiko WADA, Akiko OHKUBO

Niigata College of Nursing

Summary The purpose of this study was to investigate changes in “the maternal affect toward babies” in nursing students participating in a clinical nursing practicum. Using Analysis of Variance, we measured this affect in 75 students, focusing particularly on the period during the maternal and pediatric nursing practicums.

The results are as follows:

- 1) “The approach feeling scores” of the students after the maternal nursing practicum or the whole clinical nursing practicum were significantly higher than those of students after the pediatric nursing practicum.
- 2) There was no significant difference between “the avoidance feeling scores” of the students after the maternal nursing practicum and those of students after the pediatric nursing practicum.
- 3) No significant differences were seen between “the conflict index” of students after the maternal nursing practicum and that of students after the pediatric nursing practicum.
- 4) “The maternal affect toward babies” shown by the students indicated that the order of the maternal and pediatric nursing practicums did not influence subsequent in the students.

要約 この研究の目的は、臨床看護学実習に参加している看護学生の「対児感情」の変化を明らかにすることである。特に、母性と小児看護学実習期間に注目し、分散分析を用いて、75名の対象者の感情を測定した。

結果は次のようである。

- 1) 対象者の「接近感情得点」は、母性看護学実習あるいは全ての臨床看護学実習終了後において、小児看護学実習よりも有意に高かった。
- 2) 対象者の「回避感情得点」は、母性看護学実習と小児看護学実習後では、有意差は認められなかった。
- 3) 対象者の「拮抗指数」は、母性看護学実習と小児看護学実習後では、それらの間に有意差は認められなかった。
- 4) 対象者によって表された「対児感情」は、母性と小児看護学実習の順序が彼らのその感情に影響をおよぼさないことを示した。

Key words 看護学生 (Nursing Student)
対児感情 (Maternal Affect Toward Babies)
母性看護学実習 (Maternal Nursing Practicum)
小児看護学実習 (Pediatric Nursing Practicum)

はじめに

対児感情とは、児に対する感情が母親だけではなく未婚女性や父親をはじめとする男性にも適用すると考え、母性愛や母性感情に変わる用語として定義されているものである(花沢 1992)。花沢(1992)は、乳児接触体験と対児感情について、一般の大学生を対象に調査し、児童期から乳児との接触経験を多くもった青年は対児感情が高いという傾向が認められると報告している。このように対児感情とは、母性の形成、発達を考える上で中核となる感情であり、個人の生育史上の諸経験を基礎として生成され、発達するものと考えられている(花沢 1989)。

一方、一般の大学生と異なり看護学生の場合は、看護実習での出産、出産後の母子への関わり、子どもとの接触経験といった学習により、母性および小児看護学実習前後の対児感情に影響することがいわれている(森下 1992, 土居・大槻 1993, 嶋松 1996, 和田ら 1999)。森下(1992)、土居・大槻(1993)は母性看護学実習を経験することにより、児を否定する感情が低下すると述べている。また、嶋松(1996)は、低出生体重児を対象に日常生活のケアを実践した Growing Care Unit (GCU) 実習では、児を否定する感情が低下するだけでなく、肯定する感情も高まると報告した。これらの結果は、感情の変化の内容は異なるが、いずれにせよ実習経験により児への感情が positive な方向に変化したことを示している。しかし、これらの結果からは、このような変化は持続するものなのか、それとも実習の前後だけにあらわれた一過性のものなのかということについて明らかになっていない。そのため、和田ら(1999)は、看護学生を対象に1年次より卒業時までの3年間に渡って縦断的に調査した。その結果、母性看護学実習前より実習後に児を肯定する感情は高くなり、また否定する感情は低くなること、かつそれらは卒業時まで継続し、対児感情の変化の持続性が示された。

看護学生の母性観に着目した柳川ら(1993)は、母性看護学実習を終了した学生を対象に自己記入式の質問紙調査を行い、母性看護学実習の感想をいくつかの視点よりまとめた。その結果、新生児室での実習後、9割以上の学生が新生児に対して肯定的な反応を示していた。また、竹ノ内・内海(1990, 1992)は、看護学生の母性性を構成する因子を6因子抽出し、そのなかに子ども肯定因子を挙げ、看護学生の母性性が個々の学生の生育歴や個人特性と関係し、

学年進行により変化することを見出した。これらの調査結果は、看護学生の対児感情が、母性看護学での実習経験によって影響されていることをあらわしていると思われる。

一方、大久保ら(2000, 2001)は、Neonatal Intensive Care Unit (NICU) 見学実習前後の対児感情の変化を報告している。それによると、実習前より実習後に児を肯定する感情は下がり、児を肯定し否定する葛藤感情が高まること、また、見学実習後にカンファレンスを取り入れた学年では、児を肯定する感情は下がるが、同様に児を否定する感情も低くなることが示された。同じく NICU 実習で低出生体重児や未熟児に関わることによって、看護学生の低出生体重児に対するイメージは、「かわいい、頼りない、不安な、小さい」といった傾向が強かったという報告がされている(本間・小柳 1995)。また、看護学生の実習時の未熟児に対するイメージが、「小さい、痛々しい、可哀相」、「とても赤ちゃんとは思えない」といった negative なものであったという報告もある(橋本ら 1987, 中川ら 1993)。さらに窪田ら(1997)は、看護学生の知識、技術の自信のなさに加え、未熟児に対する「弱い、小さい、重症」というイメージが影響して、NICU 実習での不安が大きくなることを指摘している。

以上のことから、母性看護学実習と NICU 実習とでは、看護学生の児に対する感情の変化の様相に違いがあることが考えられる。

そこで本研究では、看護学生の対児感情の変化について、臨床実習開始前から臨床実習終了後まで同一対象者に対し調査し、母性および小児看護学実習が及ぼす影響に違いがあるのかということを検討することを目的とする。

方法

調査対象者

平成12年度にN県立看護短期大学看護学科3年生99名中、調査の同意が得られ、また4回にわたり調査を実施できた女子学生75名であった。

また、調査依頼時、本調査の参加の有無により実習評価に影響がないこと、結果は統計処理がなされプライバシーが保持されることを説明し、承諾を得た。

対象者の実習配置および内容

(1) 母性および小児看護学実習配置

看護短期大学で定められた平成 12 年度臨床看護学実習は、「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ，老人看護学実習，精神看護学実習，小児看護学実習Ⅱ，母性看護学実習Ⅱ」であった。臨床看護学実習配置により、「小児看護学実習Ⅱ」を「母性看護学実習Ⅱ」より先に実施したのは 6 グループ 60 名，「母性看護学実習Ⅱ」を「小児看護学実習Ⅱ」より先に実施したのは 4 グループ 39 名であった。

(2) 「母性看護学実習Ⅱ (90 時間)」

本実習は 3 年次に実施されるもので，すでに 1 年次に「母性看護学概論」，2 年次に「母性保健」，「母性臨床看護学」，「母性看護実習Ⅰ (母性看護技術演習)」の各講義と演習が終了している。1 グループ 10 名を基準に，2 ヶ所の病院に分かれて 2 週間実施している。褥室 4 日間，新生児室 2 日間，外来実習 2 日間を基本とし，分娩室での実習は分娩がある場合のみとし，原則として正常経過をたどる褥婦 1 名，新生児 1 名，妊婦 1 名を受け持つ。

(3) 「小児看護学実習Ⅱ (90 時間)」

本実習は 3 年次に実施されるもので，すでに 1 年次に「小児看護学概論」，2 年次に「小児保健」，「小児臨床看護学」，「小児看護学実習Ⅰ (保育園実習)」の各講義と実習が終了している。1 グループ 10 名を基準に，小児病棟 4 日間，NICU 1 日間，重症心身障害児(者)施設 3 日間の実習である。NICU の実習は，学生 2～3 人が半日入室して見学を行う。学生への指導は専任の臨床実習指導者が担当している。

調査期間

平成 12 年臨床実習開始前の 4 月から臨床実習終了後の 11 月であった。

調査用紙

児に対する感情を測定するために、「対児感情評定尺度 (1996 年版)」(花沢 1996) を使用した。この尺度は児に対する感情を，肯定・愛着的方向の接近感情と，否定・嫌悪的方向の回避感情との 2 次元から構成され，これらの感情をあらわす形容詞 28 語から作られている。28 語は表 1 に示したように，「あかるい」，「いじらしい」などの接近項目 14 語と，「めんどくさい」，「いらだたしい」などの回避項目 14 語である。回答は，「赤ちゃんに対してどのような気持ちを感じているか」について，形容詞項目ごとで「非常にそのとおり」から「そんなことはない」の 4 件法で，それぞれに 3 点から 0 点を配してある。

表 1 対児感情評定尺度項目

接近項目	回避項目
あかるい	よわよわしい
おもしろい	めんどくさい
いじらしい	いらだたしい
たのしい	やかましい
いとoshい	わずらわしい
まるい	あつかましい
うつくしい	うっとうしい
あまい	くさい
ういういしい	こわい
しろい	うるさい
すばらしい	じれったい
やさしい	きたない
みずみずしい	にくらしい
うれしい	むずかしい

調査方法

看護学生を対象に，4 回にわたり，質問紙を配表調査法にて実施し，回答を得た。第一回目は臨床実習開始前，第二回目および第三回目は，母性看護学実習Ⅱおよび小児看護学実習Ⅱの終了後，そして最終回目は全ての臨床実習終了後であった。

分析方法

「対児感情評定尺度」として，接近感情の 14 項目の得点を合計した接近得点，回避感情の 14 項目の得点を合計した回避得点，接近感情と回避感情が個人のうちでどのように拮抗しているかを示す拮抗指数 (拮抗指数 = 回避得点 / 接近得点 × 100) の 3 変数を算出した。

以上の 3 変数の平均と標準偏差を求めた。まず，臨床実習前の 3 変数について，母性看護学実習，小児看護学実習の順で実習を実施した対象者群 (以下，母性・小児群とする) と小児看護学実習，母性看護学実習の順で実習を実施した対象者群 (以下，小児・母性群とする) とで，対応のない t 検定を行った。

次に，母性・小児群と小児・母性群別に，3 変数について，臨床実習開始前，母性看護学実習終了後，小児看護学実習終了後，全ての臨床実習終了後の 4 時期を水準として 1×4 の分散分析を行った。有意水準は 1% および 5% とした。

なお，統計処理には統計パッケージ SAS System for Windows Release 6.12 を使用した。

結果

対象群の等質性について

まず，実習の実施順序による影響を調べるために，臨床実習開始前の 3 変数について，母性・小児群と

小児・母性群とで、対応のない t 検定を行った。

接近得点について、母性・小児群の平均点は、23.27 (SD=6.85, n=30), 小児・母性群の平均点は、24.69 (SD=7.69, n=45) であった。対応のない t 検定を行った結果、有意差は認められなかった (t (73) =0.41, n. s.) (表2)。

回避得点について、母性・小児群の平均点は、9.54 (SD=6.27, n=28), 小児・母性群の平均点は、10.69 (SD=6.03, n=45) であった。対応のない t 検定を行った結果、有意差は認められなかった (t (71) =0.44, n. s.) (表3)。

拮抗指数について、母性・小児群の平均点は、43.17 (SD=27.79, n=28), 小児・母性群の平均点は、43.13 (SD=21.46, n=41) であった。対応のない t 検定を行った結果、有意差は認められなかった (t (67) =0.73, n. s.) (表4)。

表2 接近得点の平均と t 検定結果

	N	M (SD)	t
母性-小児群	30	23.27 (6.85)	0.4155 n. s.
小児-母性群	45	24.69 (7.69)	

表3 回避得点の平均と t 検定結果

	N	M (SD)	t
母性-小児群	28	9.54 (6.27)	0.4366 n. s.
小児-母性群	45	10.69 (6.03)	

表4 拮抗指数の平均と t 検定結果

	N	M (SD)	t
母性-小児群	28	43.17 (27.79)	0.7317 n. s.
小児-母性群	41	41.13 (21.46)	

対児感情について

(1) 母性・小児群

接近得点の平均は臨床実習開始前 23.27 (SD=6.85, n=30), 母性看護学実習終了後 27.53 (SD=7.11, n=30), 小児看護学実習終了後 21.59 (SD=8.87, n=29), 臨床実習終了後 27.30 (SD=7.15, n=30) であった。分散分析の結果、有意差が認められた (F= (3, 115) 4.58, p<.01)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、小児看護学実習終了後より母性看護学実習終了後および全ての臨床実習終了後のほうが接近得点は高かった (図1)。

回避得点の平均は臨床実習開始前 9.58 (SD=6.27, n=28), 母性看護学実習終了後 9.50 (SD=6.82, n=30), 小児看護学実習終了後 7.50 (SD=5.64, n=30), 全ての臨床実習終了後 9.50 (SD=7.19, n=30) であった。分散分析を行ったところ、有意差は認められなかった (F (3, 114) =0.71) (図2)。

拮抗指数の平均は臨床実習開始前 43.17 (SD=27.79, n=28), 母性看護学実習終了後 35.49 (SD=27.36, n=30), 小児看護学実習終了後 34.63 (SD=23.95, n=28), 全ての臨床実習終了後 33.42 (SD=24.46, n=29) であった。分散分析を行ったところ、有意差は認められなかった (F (3, 114) =0.82) (図3)。

(2) 小児・母性群

接近得点の平均は臨床実習開始前 24.69 (SD=7.69, n=45), 小児看護学実習終了後 21.25 (SD=7.27, n=44), 母性看護学実習終了後 25.80 (SD=7.90, n=45),

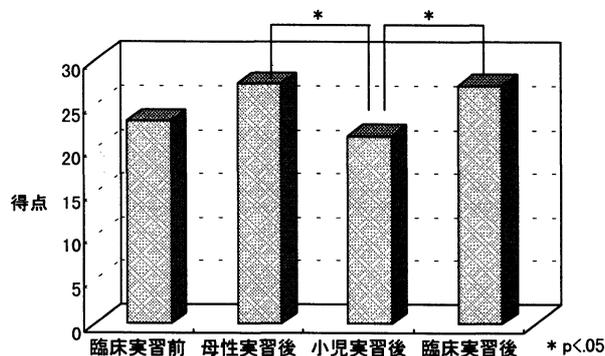


図1 母性-小児群接近得点

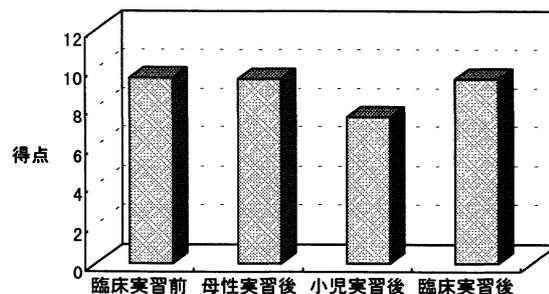


図2 母性-小児群回避得点

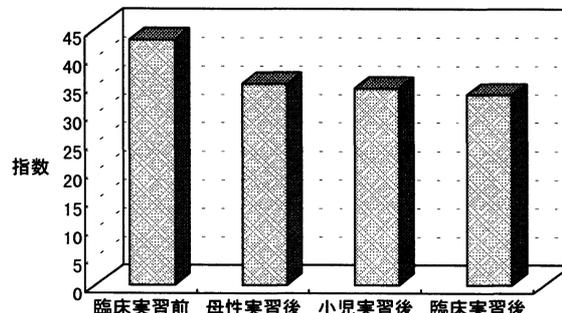


図3 母性-小児群拮抗指数

全ての臨床実習終了後 27.29 (SD=7.88, n=45) であった。分散分析の結果、有意差が認められた ($F=(3,175) 4.96, p<.01$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、小児看護学実習終了後より母性看護学実習終了後および全ての臨床実習終了後の方が接近得点は高かった (図 4)。

回避得点の平均は臨床実習開始前 10.69 (SD=6.03, n=45), 小児看護学実習終了後 6.60 (SD=3.90, n=45), 母性看護学実習終了後 7.27 (SD=4.48, n=45), 全ての臨床実習終了後 8.80 (SD=5.07, n=45) であった。分散分析を行ったところ、有意差が認められた ($F=(3,176) 6.10, p<.01$)。Tukey 法による多重

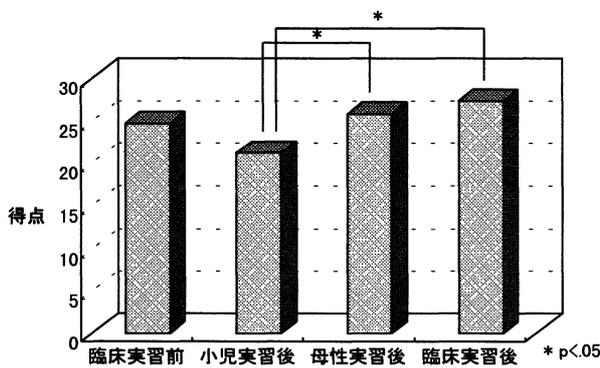


図4 小児-母性群接近得点

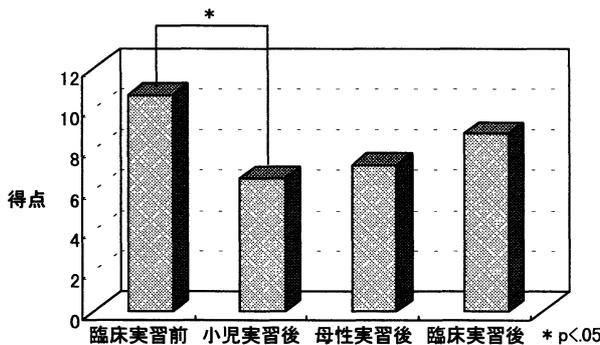


図5 小児-母性群回避得点

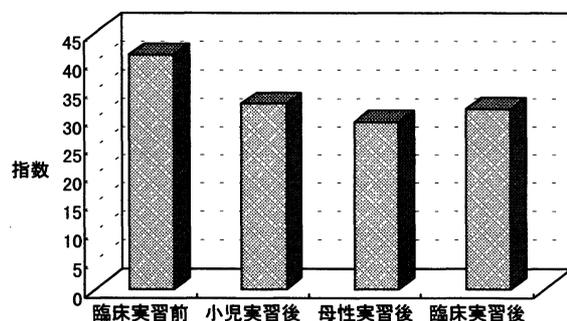


図6 小児-母性群拮抗指数

比較を行ったところ、臨床実習開始前より小児看護学実習終了後の方が回避得点は低かった (図 5)。

拮抗指数の平均は臨床実習開始前 41.12 (SD=21.46, n=41), 小児看護学実習終了後 32.61 (SD=21.36, n=42), 母性看護学実習終了後 29.42 (SD=20.21, n=44), 全ての臨床実習終了後 33.42 (SD=24.46, n=42) であった。分散分析を行ったところ、有意差は認められなかった ($F(3,165) = 2.43$) (図 6)。

考 察

母性・小児群と小児・母性群との比較で、接近感情、回避感情、拮抗指数について有意差が認められなかったことから、対象者群間の対児感情について等質性が確認された。

そこで、各対象者群の時期についてみたところ、対児感情の変化が認められた。

接近得点は、母性・小児群では、母性看護学実習終了後より小児看護学実習終了後に接近得点が低下し、小児看護学実習終了後より全ての臨床実習終了後に上昇した。また、小児・母性群では、小児看護学実習終了後より母性看護学実習終了後および全ての臨床実習終了後に上昇した。どちらの群も、小児看護学実習終了後より、母性看護学実習終了後および全ての臨床実習終了後に接近得点が高いことから、小児看護学実習より母性看護学実習では、児に対する接近感情が高まり、その感情は全ての臨床実習終了時まで維持され、母性看護学実習と小児看護学実習の順序に影響はなかったと考えられる。しかし、臨床実習開始前と母性・小児看護学実習終了後、臨床実習開始前と全ての臨床実習終了後との間には差はなかったことから、実習による児に対する接近感情の高まりは認められなかったといえる。

回避得点は、大久保ら (2001) の、NICU 見学実習前より実習後に、児を否定する感情も低くなる結果と同様に、小児・母性群で、臨床実習前より小児看護学実習後に低下した。しかし、回避得点、拮抗指数ともに、母性・小児群および小児・母性群のどちらの群も、接近感情に見られた母性看護学実習と小児看護学実習との差はなく、また、臨床実習開始前、全ての臨床実習終了後の差も見られなかったことから、児を否定し拒否する感情と、児を肯定する感情と否定する感情との葛藤状態については、実習による影響は考えられなかった。

小児看護学実習より母性看護学実習では、これま

での報告(森下 1992, 土居・大槻 1993, 嶋松 1996)同様に, 実習経験により児への感情が **positive** な方向に変化することが考えられる。しかし, 臨床実習開始前と臨床実習終了後とでは有意差はなく, 和田ら(1999)の母性看護学実習前より実習後に児を肯定する感情は高くなり, また否定する感情は低くなり, かつそれらは卒業時まで継続する結果とは異なる結果であり, 臨床実習開始前と終了後の対児感情の発達は考えられなかった。これは, 本研究では4回にわたる調査をおこない対象者人数が少ないことが, 結果に影響したのではないかと推察される。

対児感情は乳児との接触経験が影響すると言われている(花沢 1992)。児に対する接近感情が母性看護学実習で高く, 逆に小児看護学実習で低かった要因として, 1つには実習方法の違いが挙げられる。母性看護学では新生児室における2日間の実践実習を行っているのに対し, 小児看護学実習では半日のNICUの見学実習であるためと考えられる。また, 新生児室の正常新生児やGCUでの退院に向けて療養している健康度の高い児と, 中川ら(1993), 窪田ら(1997), 本間・小柳(1995)の結果からも看護学生が捉えられている, 小さく, 驚きを持つリスクの高い低出生体重児といった健康度の違いにより接近感情が下がったと考えられる。

このように, 母性看護学実習と小児看護学実習での児に対する感情に大きな違いがあったことは, 児との接触が対児感情の発達に重要な要素となると考えられた。このことは, 新生児室実習で9割以上の学生が新生児に対して肯定的な反応を示していた柳川ら(1993)の調査や, 竹ノ内・内海(1990, 1992)が, 看護学生の母性性を構成する因子の1つに子ども肯定因子をあげていることを支持できる。

小児看護学実習で一旦低下する児への肯定的かつ受容的感情が全ての臨床実習終了後に再び上昇することから, 対児感情は, 小児看護学実習終了後も他の臨床実習の様々な経験を通して, 修正され再構成されるのではないかということが示唆された。また, 対児感情の発達には, 小児看護学実習と母性看護学実習の実習順序が影響を及ぼさないことが考えられた。今後も看護学生の実習での経験内容を含めた対児感情の発達について検討が必要である。

引用文献

土居久子, 大槻優子: 母性看護実習と母性意識の変容—花

沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用い実習前後の対児感情・母性意識の測定から—, 順天堂医療短期大学紀要 4, 50~58, 1993.

花沢成一: 母性の獲得(依田 明編: 性格心理学2新講座 性格形成), 金子書房, 東京, 1989.

花沢成一: 母性心理学, 医学書院, 東京, 1992.

花沢成一: 対児感情評定尺度, 1996. (未公開)

橋本朝美, 大橋千恵子, 小田原良子ほか: 特殊新生児室の臨床実習での学生の学び, 第18回日本看護学会論文集—看護教育—, 9~11, 1987.

本間昭子, 小柳恭子: NICUでの見学実習と実践を中心とした実習が及ぼす影響—低出生体重児のイメージ・低出生体重児看護に対する意欲の比較—, 看護教育の研究 10号 265~281, 1995.

窪田貴久代, 角井幸子, 毛田敏江: NICU実習における学生の不安, 第28回日本看護学会論文集—看護教育—, 146~148, 1997.

森下節子: 看護学生の母性意識の発達—母性看護実習にみる意識の変容—, 母性衛生, 33(3), 297~303, 1992.

中川文子, 立石里美, 山田静子ほか: 教育課程の異なる3校の学生のNICU実習に対する認識について, 第24回日本看護学会論文集—看護教育— 119~121, 1993.

大久保明子, 福原紀, 秋山啓子ほか: NICU見学実習による対児感情の変化, 第31回日本看護学会論文集—看護教育—, 15~17, 2000.

大久保明子, 和田佳子, 秋山啓子: NICU実習の学生の対児感情におけるカンファレンス導入の効果, 新潟県立看護短期大学紀要第7巻, 3~8, 2001.

嶋松陽子: 対児感情にみる看護学生の母性意識の発達—低出生体重児との接触体験が及ぼす影響—, 聖マリア学院紀要 11, 22~31, 1996.

竹ノ内ケイ子, 内海 滉: 看護学生の母性性の発達に関する研究(1), 日本看護研究学会雑誌, 13(4), 35~46, 1990.

竹ノ内ケイ子, 内海 滉: 看護学生の母性性の発達に関する研究(2), 日本看護研究学会雑誌, 15(3), 9~19, 1992.

和田佳子, 今津ひとみ, 大石武信ほか: 看護学生の対児感情に及ぼす母性看護実習の影響, 日本心理学会第63回大会発表論文集, 895, 1999.

柳川育子, 五十嵐利子, 谷口尚樹: 母性看護実習感想調査資料の一解析, 看護教育 34(2), 138~144, 1993.